九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『母さん父さん、楽になろう』　碇　浩一　著

窪田，貴子

https://doi.org/10.15017/9009

出版情報：生活体験学習研究. 1, pp.95-95, 2001-01-01. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

母さん父さん、楽になろう

碇　　浩　一　著
Ikari　Kouichi

表紙を見た時、まっ先に目に飛び込んでくる赤の帯封に大きく描かれた文字―『幼老共生』。タイトルよりも目立つ。

『幼老共生』ってどういうことだろう。何となくはわかる。そう思いながら表紙をめくると、そこにはまた、「『幼老共生』―それは、子どもと老人の、親密で豊かな関係。」とある。著者にとって最も訴えたいことが、まさにこの四字熟語に集約されているのだ。

著者は、血族の結びつきでも利害の結びつきでも、知的な結びつきでもない、「幼」と「老」の心地よい結びつきを『幼老共生』と名付け、真に豊かな21世紀社会を築くための提言とした。この発想は、毎年訪れている中国のウイグル民族から学んだものだという。

精神科医である著者は、1950年代にアメリカの社会学者 T.パーソンズが評価した核家族を単位とする社会システムが崩壊したことを、様々な社会問題や社会現象を例に挙げながら考察している。

特に、尾崎豊のカリスマ性に対する分析は興味深い。若者たちは、尾崎の歌う核家族の愛の苦しさ、社会に入っていけないという閉塞感といらだちに深く共鳴したのだという。

また、オウム真理教事件や神戸児童殺害事件についての分析もなされ、説得力を持って核家族の矛盾点を指摘している。

さらに、核家族化は「老い」を恐れ、憎み、排除した社会を作り出しているともいう。現役世代にとって、定年は即、社会的死を意味し、65歳になると保護しなければならない対象と化すのである。しかし、実際の高齢者はもっと元気で、強く、長い人生を歩んできた英知に富む。著者はその元気な高齢者に向け、「もっと社会に遠慮せず、自由に生き、生涯現役であれ！」とエールを送っている。本書は、高齢者への応援歌でもあるのだ。

さらに、その豊かな英知を核家族化で破綻した子育てに活かしてほしいという。子育ては、若い未熟な父母だけでは出来ないのである。まさに同感だ。子育ては難しいのだから、困ったら素直に相談しようという若い親へのメッセージは、肩の力が抜けるし説得力もある。血縁関係のない高齢者のアドバイスは、かえって素直に聞けたりするものだ、などと自分の子育てを振り返りながら思った。

しかしながら、経験豊かな高齢者が、必要以上に手を出さずに、子どもたちに基本的信頼感を抱かせる、豊かで優しいまなざしを向けることが出来るのだろうか。なぜなら、高齢者の中には、「子どもは未熟で何も出来ないもの」という意識が少なからず存在し、それが子どもにとって必要な体験を奪ってしまっているケースがあると思うからだ。

また、厚生省の「1999年度国民生活基礎調査の概況」によると、少子高齢化で世帯の小規模化が一段と進んできているいう。この様な逆風の中で、筆者の提案する幼老共生の社会を実現させることが果たして出来るのであろうか。本書のエピローグで出された幼老共生の場の具体的イメージは、まさに理想郷である。しかし、この理想郷を実現させるためには、行政や民間企業、研究者、市民など、沢山の人々が協働しなければならないであろうし、かなりのエネルギーを費やすことになるだろう。それを誰がどのようにやっていくのかというアクションプログラムの提示を、今後著者に期待したい。

（窪田　貴子）